



山月記

中島 敦



青空文庫



青空
文庫

隴西ろうさいの李徴りちようは博学才穎さいえい、天宝の末年、若くして名を
 虎榜こぼうに連ね、ついで江南尉こうなんいに補せられたが、性、狷介けんかい、
 自ら侍むところ頗すこぶる厚く、賤吏せんりに甘んずるを潔いさぎよしとし
 なかつた。いくばくもなく官を退いた後は、故山こざん、
 號略かくりやくに帰臥きがし、人と交まじわりを絶つて、ひたすら詩作に耽ふけつ
 た。下吏となつて長く膝ひざを俗悪な大官の前に屈するよ
 りは、詩家としての名を死後百年に遺のこそうとしたので
 ある。しかし、文名は容易に揚らず、生活は日を逐おう

て苦しくなる。李徴は漸く焦躁に駆られて来た。この頃ころからその容貌ようぼうも峭刻しやうこくとなり、肉落ち骨秀ひいで、眼光こうがうのみ徒らいたずらに炯々けいけいとして、曾て進士かつに登第とうだいした頃の豊頬ほうききょうの美少年おもかげの倂おもかげは、何処どこに求めようもない。数年の後、貧窮ひんきゆうに堪たえず、妻子の衣食のために遂ついに節を屈して、再び東へ赴き、一地方官吏の職を奉ずることになった。一方、これは、己おのれの詩業に半ば絶望したためでもある。曾ての同輩は既に遥はるか高位に進み、彼が昔、鈍物として齒牙しがにもかけなかつたその連中の下命を拝さねばならぬことが、往年の儁才しゆんさい李徴の自尊心を如何いかに傷きずつけた

かは、想像に難くない。彼は快々として楽しまず、
 狂悖きやうはいの性は愈々抑え難くなつた。一年の後、公用で旅
 に出、汝水じよすいのほとりに宿つた時、遂に発狂した。或夜ある
 半、急に顔色を変えて寢床から起上ると、何か訳の分
 らぬことを叫びつつそのまま下にとび下りて、闇やみの中
 へ駈出かけだした。彼は二度と戻もどつて来なかつた。附近の山
 野を搜索しても、何の手掛りもない。その後李徴がど
 うなつたかを知る者は、誰だれもなかつた。
 翌年、監察御史かんさつぎよし、陳郡ちんぐんの袁慆えんさんという者、勅命を奉じ
 て嶺南れいなんに使い、途みちに商於しょうおの地に宿つた。次の朝未まだ暗

い中うちに出発しようとしたところ、馭吏ごりが言うことに、
 これから先の道に人喰虎ひとくいどらが出る故ゆえ、旅人は白昼でなけ
 れば、通れない。今はまだ朝が早いから、今少し待た
 れたが宜よろしいでしよう。袁修は、しかし、供廻ともまわりの
 多勢たせいなのを待み、馭吏の言葉を斥しりぞけて、出発した。残
 月の光をたよりに林中の草地を通つて行つた時、果し
 て一匹の猛虎もうこが叢くさむらの中から躍り出た。虎は、あわや袁
 修に躍りかかるかと思えたが、忽たちまち身を翻ひるがえして、元の
 叢に隠れた。叢の中から人間の声で「あぶないところ
 だった」と繰返しつぎや呟くのが聞えた。その声に袁修は聞

き憶えおぼがあつた。驚懼きょうくの中にも、彼は咄嗟とつさに思いあ
たつて、叫んだ。「その声は、我が友、李徴子ではない
か？」袁修は李徴と同年に進士の第に登り、友人の少
かつた李徴にとつては、最も親しい友であつた。温和
な袁修の性格が、峻峭しゅんしょうな李徴の性情と衝突しなかつた
ためであろう。

叢の中からは、暫しばらく返辞が無かつた。しのび泣きか
と思われる微かすかな声が時々洩もれるばかりである。やや
あつて、低い声が答えた。「如何にも自分は隴西の李徴
である」と。

袁修は恐怖を忘れ、馬から下りて叢に近づき、懐かしげに久闊きゆうくわつを叙した。そして、何故なぜ叢から出て来ないのかと問うた。李徴の声が答えて言う。自分は今や異類の身となつてゐる。どうして、おめおめと故人ともの前にあさましい姿をさらせようか。かつ又、自分が姿を現せば、必ず君に畏怖嫌厭いふけんえんの情を起させるに決つてゐるからだ。しかし、今、凶らずも故人に遇あうことを得て、愧赧きたんの念をも忘れる程に懐かしい。どうか、ほんの暫くでいいから、我が醜悪な今の外形を厭いとわず、曾て君の友李徴であつたこの自分と話を交してくれない

だろうか。

後で考えれば不思議だったが、その時、袁愴は、この超自然の怪異を、実に素直に受容うけいれて、少しも怪も
うとしなかつた。彼は部下に命じて行列の進行を停とめ、
自分は叢かたわらの傍に立って、見えざる声と対談した。都の
噂うわさ、旧友の消息、袁愴が現在の地位、それに対する李
徴の祝辞。青年時代に親しかつた者同志の、あの隔て
のない語調で、それ等らが語られた後、袁愴は、李徴が
どうして今の身となるに至つたかを訊たずねた。草中の声
は次のように語つた。

今から一年程前、自分が旅に出て汝水のほとりに泊った夜のことに、一睡してから、ふと眼を覚ますと、戸外で誰かが我が名を呼んでいる。声に応じて外へ出て見ると、声は闇の中から頻りに自分を招く。覚え、自分は声を追うて走り出した。無我夢中で駈けて行く中に、何時しか途は山林に入り、しかも、知らぬ間に自分は左右の手で地を攫んで走っていた。何か身体中に力が充ち満ちたような感じで、軽々と岩石を跳び越えて行つた。気が付くと、手先や肱のあたりに毛を生じているらしい。少し明るくなつてから、谷川に臨ん

で姿を映して見ると、既に虎となっていた。自分は初め眼を信じなかつた。次に、これは夢に違いないと考えた。夢の中で、これは夢だぞと知っているような夢を、自分はそれまでに見たことがあつたから。どうしても夢でないと悟らねばならなかつた時、自分は茫然ぼうぜんとした。そうして懼おそれた。全く、どんな事でも起り得るのだと思うて、深く懼れた。しかし、何故こんな事になつたのだらう。分らぬ。全く何事も我々には判わからぬ。理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取つて、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きも

ののさだめだ。自分は直ぐに死を想うた。しかし、その時、眼の前を一匹の兎うさぎが駆け過ぎるのを見た途端に、自分の中の人間は忽ち姿を消した。再び自分の中の人間が目を覚ました時、自分の口は兎の血に塗れまみ、あたりには兎の毛が散らばっていた。これが虎としての最初の経験であつた。それ以来今までにどんな所行をし続けて来たか、それは到底語るに忍びない。ただ、一日の中に必ず数時間は、人間の心が還かえつて来る。そういう時には、曾ての日と同じく、人語も操あやつれれば、複雑な思考にも堪え得るし、経書けいしょの章句を誦そらんずること

も出来る。その人間の心で、虎としての己おのれの残虐な行ざんぎやくのあとを見、己おのれの運命をふりかえる時が、最も情なく、恐しく、憤いきどおろしい。しかし、その、人間にかえる数時間も、日を経るに従って次第に短くなつて行く。今までは、どうして虎などになつたかと怪しんでいたのに、この間ひよいと気が付いて見たら、己おのれはどうして以前、人間だつたのかと考えていた。これは恐しいことだ。今少し経たてば、己おのれの中の人間の心は、獣としての習慣の中にすっかり埋うもれて消えて了しまうだろう。ちようど、古い宮殿の礎いしずえが次第に土砂に埋没するように。そうす

れば、しまいには己は自分の過去を忘れ果て、一匹の虎として狂い廻り、今日のように途で君と出会つても故人と認めることなく、君を裂き喰うて何の悔も感じないだろう。一体、獣でも人間でも、もとは何か他のものだったんだろう。初めはそれを憶えているが、次第に忘れて了い、初めから今の形のものだったと思ひ込んでいるのではないか？ いや、そんな事はどうでもいい。己の中の人間の心がすっかり消えて了えば、恐らく、その方が、己はしあわせになれるだろう。だのに、己の中の人間は、その事を、この上なく恐しく

感じているのだ。ああ、全く、どんなに、恐しく、哀かなしく、切なく思っているだろう！ 己が人間だった記憶のなくなることを。この気持は誰にも分らない。誰にも分らない。己と同じ身の上に成った者でなければ。ところで、そうだ。己がすっかり人間でなくなつて了う前に、一つ頼んで置きたいことがある。

袁儻はじめ一行は、息をのんで、叢中そうちゆうの声の語る不思議に聞入っていた。声は続けて言う。

他でもない。自分は元来詩人として名を成す積りであった。しかも、業未いまだ成らざるに、この運命に立至つ

た。曾て作るところの詩數百篇、固より、まだ世に行
われておらぬ。遺稿の所在も最早判らなくなつていよ
う。ところで、その中、今も尚記誦せるものが數十あ
る。これを我が為に伝録して戴きたいのだ。何も、こ
れに仍つて一人前の詩人面をしたいのではない。作の
巧拙は知らず、とにかく、産を破り心を狂わせてまで
自分が生涯それに執着したところのものを、一部なり
とも後代に伝えないでは、死んでも死に切れないのだ。
袁修は部下に命じ、筆を執つて叢中の声に随つて書
きとらせた。李徴の声は叢の中から朗々と響いた。長

短凡およそ三十篇、格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の才の非凡を思わせるものばかりである。しかし、袁儻は感嘆しながらも漠然ぼくぜんと次のように感じていた。成程なるほど、作者の素質が第一流に属するものであることは疑いない。しかし、このままでは、第一流の作品となるのは、何処どこか（非常に微妙な点に於おいて）欠けるところがあるのではないか、と。

旧詩を吐き終った李徴の声は、突然調子を変え、自らあざけを嘲あざけるか如ごとくに言った。

羞はずかしいことだが、今でも、こんなあさましい身と成

り果てた今でも、己おれは、己おれの詩集ちようあんが長安風流人士の机の上に置かれている様を、夢に見ることがあるのだ。岩窟がんくつの中に横たわって見る夢にだよ。嗤わらつてくれ。詩人に成りそこなつて虎になつた哀れな男を。(袁修は昔の青年李徴じちようへきの自嘲癖を思出しながら、哀しく聞いていた。) そうだ。お笑い草ついでに、今の懐おもいを即席の詩に述べて見ようか。この虎の中に、まだ、曾ての李徴が生きてゐるし、いに。

袁修は又下吏に命じてこれを書きとらせた。その詩に言う。

偶因狂疾成殊類 災患相仍不可逃

今日爪牙誰敢敵 當時声跡共相高

我為異物蓬茅下 君已乘輶氣勢豪

此夕溪山對明月 不成長嘯但成嘯

時に、残月、光冷ひややかに、白露は地に滋しげく、樹間を渡る冷風は既に暁の近きを告げていた。人々は最早、事の奇異を忘れ、肅然として、この詩人の薄倖はっこうを嘆じた。李徴の声は再び続ける。

何故なげこんな運命になつたか判らぬと、先刻は言つたが、しかし、考えように依よれば、思い当ることが全然ないでもない。人間であつた時、己おれは努めて人との交まじわりを避けた。人々は己を倨傲きよぼうだ、尊大だといった。実は、それが殆ど羞恥心しゆうちしんに近いものであることを、人々は知らなかつた。勿論もちろん、曾ての郷党きやうとうの鬼才といわれた自分に、自尊心が無かつたとは云いわれない。しかし、それは臆病おくびような自尊心とでもいうべきものであつた。己は詩によつて名を成そうと思ひながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交つて切磋琢磨せつさたくまに努めたりすることをし

なかつた。かといつて、又、己は俗物の間に伍ごするこ
とも潔いさぎよしとしなかつた。共に、我が臆病な自尊心と、
尊大な羞恥心との所せ為いである。己の珠たまに非あらざることを
惧おそれるが故ゆえに、敢あえて刻苦して磨みがこうともせず、又、己
の珠なるべきを半ば信ずるが故に、碌ろくろく々として瓦かわらに伍
することも出来なかつた。己おれは次第に世と離れ、人と
遠ふんもんざかり、憤悶ざんいと慙ま懣まとによつて益々ますますおのれ己の内なる臆病
な自尊心を飼いふとらせ、結果になつた。人間は誰で
も猛獸使であり、その猛獸に当るのが、各人の性情だ
という。己おれの場合、この尊大な羞恥心が猛獸だつた。

虎だったのだ。これが己を損い、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、己の外形をかくの如く、内心にふさわしいものに変えて了ったのだ。今思えば、全く、己は、己の有^もつていた僅^{わず}かばかりの才能を空費して了った訳だ。人生は何事をも為^なさぬには余りに長いが、何事かを為すには余りに短いなどと口先ばかりの警句を弄^{ろう}しながら、事實は、才能の不足を暴露^{ばくろ}するかも知れないとの卑怯^{ひきよう}な危惧^{きぐ}と、刻苦を厭^{いと}う怠惰とが己の凡^{すべ}てだったのだ。己よりも遥かに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家と

なつた者が幾らでもいるのだ。虎と成り果てた今、己は漸くようやそれに気が付いた。それを思うと、己は今も胸を灼やかれるような悔を感じる。己には最早人間としての生活は出来ない。たとえば、今、己が頭の中で、どんな優れた詩を作ったにしたところで、どういう手段で発表できよう。まして、己の頭は日毎ひごとに虎に近づいて行く。どうすればいいのだ。己の空費された過去は？

己は堪たまらなくなる。そういう時、己は、向うの山の頂いわの巖いわに上り、空谷くうこくに向つて吼ほえる。この胸を灼く悲しみを誰かに訴えたいのだ。己は昨夕も、彼処あそこで月に

向つて咆ほえた。誰かにこの苦しみが分つて貰もらえないかと。しかし、獣どもは己の声を聞いて、唯ただ、懼おそれ、ひれ伏すばかり。山も樹きも月も露も、一匹の虎が怒り狂つて、哮たけつているとしか考えない。天に躍り地に伏して嘆いても、誰一人己の気持を分つてくれる者はない。ちようど、人間だった頃、己の傷つき易やすい内心を誰も理解してくれなかつたように。己の毛皮の濡ぬれたのは、夜露のためばかりではない。

漸あたりく四辺の暗さが薄らいで来た。木の間を伝つて、何処どこからか、暁角きょうかくが哀しげに響き始めた。

最早、別れを告げねばならぬ。酔わねばならぬ時が、(虎に還らねばならぬ時が)近づいたから、と、李徴の
声と言った。だが、お別れする前にもう一つ頼みがあ
る。それは我が妻子のことだ。彼等かれらは未だ虢略かくりやくにいる。
固より、己の運命に就いては知る筈はずがない。君が南か
ら帰ったら、己は既に死んだと彼等に告げて貰えない
だろうか。決して今日のことだけは明かさないうで欲し
い。厚かましいお願いだが、彼等の孤弱を憐れあわんで、今
後とも道塗どうとに飢凍きとうすることのないように計らって戴け
るならば、自分にとって、恩倖おんこう、これに過ぎたるは莫な

い。

言終つて、叢中から慟哭どうこくの聲が聞えた。袁もまた涙を泛うかべ、欣よろこんで李徴の意に副そいた旨むねを答えた。李徴の聲はしかし忽たちまち又先刻の自嘲的な調子に戻もどつて、言つた。

本当は、先まず、この事の方を先にお願ひすべきだつたのだ、己が人間だつたなら。飢え凍えようとする妻子のことよりも、己おのれの乏しい詩業の方を気にかけているような男だから、こんな獣に身おとを墮すのだ。

そうして、附加つけくわえて言うことに、袁儻が嶺南からの

帰途には決してこの途みちを通らないで欲しい、その時には自分が酔っていて故人ともを認めずに襲いかかるかも知れないから。又、今別れてから、前方百歩の所にある、あの丘に上ったら、此方こちらを振りかえって見て貰いたい。自分は今の姿をもう一度お目に掛けよう。勇に誇ろうとしてではない。我が醜悪な姿を示して、以てもつ、再び此処ここを過ぎて自分に会おうとの気持を君に起させない為である。

袁修は叢に向つて、懇ろねんじに別れの言葉を述べ、馬に上った。叢の中からは、又、堪たえ得ひきゆうざるが如き悲泣の

声が洩もれた。袁修も幾度か叢を振返りながら、涙の中に出発した。

一行が丘の上についた時、彼等は、言われた通りに振返って、先程の林間の草地を眺ながめた。忽ち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼等は見た。虎は、既に白く光を失った月を仰いで、二声三声咆哮ほうこうしたかと思うと、又、元の叢に躍り入って、再びその姿を見なかった。



山月記
中島 敦 著

[[青空文庫図書カード](#)]

底本：「李陵・山月記」新潮文庫、新潮社
1969（昭和44）年9月20日発行

入力：平松大樹
校正：林めぐみ

1998年11月12日公開
2010年11月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

PDF 変換

Editor : Tomoyuki Kawano

Tools : MacOS X 10.6.8(合成) + egword universal 2.0.2

Fonts : Web-O-Mints + DT Flowers + ヒラギノ